

アブデル・ハリーム・ヌール・アッディーン
『古代エジプト社会における女性の役割』

第 1 章翻訳

Abdel Halim Nur El-Din,
The Role of Women in the Ancient Egyptian Society,
Chapter 1 [Translation into Japanese]

吹田 真里子*
Mariko SUITA

解説

今回、翻訳し紹介する *The Role of Women in the Ancient Egyptian Society* (アラビア語のタイトル *المرأة في مصر القديمة*) は、アブデル・ハリーム・ヌール・アッディーン氏が 1966 年にカイロ大学に修士論文として提出したものを、1995 年にエジプトの Supreme Council Antiquities Press から単行本として出版したものである。彼は、元カイロ大学考古学部教授であり、古物最高評議会の事務局長も務めたエジプト学研究と考古行政の双方において重要な人物であった。

男性である著者が、1966 年にすでに古代エジプトの女性の研究に焦点を当てていたことは注目に値する。彼も著書の中で述べているように、古代エジプトの女性を研究テーマに選んだ理由は、当時は研究者たちのあいだでも古代エジプトの女性の役割や称号に関する研究が初期の段階であり、その状況を改善しようとしたためであった。

今回、翻訳するにあたり、この著書は執筆された時より随分と時を経て出版されており、個々の事例については後進の研究により新たな真実も多く発見されている。しかしながら、研究対象の女性を女王や王妃だけに絞るのではなく、彼女たちのまわりにいた女性にも対象を広げていることや、女王や王妃が保持した称号を古王国時代や中王国時代、そしてその両方の時代に共通する称号といった時代別に詳細に考察した点など、現在も研究をするにあたっても有益なものが多い。

本書は全 7 章からなり、扱う時代は先王朝時代から新王国時代の終わりまで網羅されている。以下、各章のタイトルと内容を挙げてみる。

第 1 章は「古代エジプトにおける女王の役割」と題し、国を統治した女王や、政治に大きな影響力を与えた王妃を選び出し、それぞれが歴史にどのような影響を与えたかについて述べてい

* Research Fellow, Kansai University

る。

第2章は「女王・王妃の称号」と題し、女王や王妃が保持していた称号が集められ、分析されている。それらの称号は大きく二つのグループに分けられ、一つ目が王と関係するもので、二つ目が神に關係するものである。それぞれの称号がどのような立場の女性に用いられているのか、そして具体的な女性の名前も挙げられている。

第3章は「王族ではない女性の称号と立場」とし、時代は新王国時代に焦点を当て、女性が就くことができた立場（職業）が考察されている。

第4章では、「王妃と彼女たちに仕える者に用いられた称号」が考察されている。この章で扱われる称号を保持している女性は王族の家系出身ではないが、社会的に地位の高い人物であることは疑いがない。この章では、そのような女性が保持した称号が考察されている。

第5章では、「古王国時代と中王国時代における称号と立場」が扱われている。この章では、王族の女性が保持した称号を時代によって細かく分けて考察している。古王国時代に見ることができる称号や立場、そして中王国時代に見ることができる称号や立場、さらに古王国と中王国時代の二つの時代に共通して見ることができる称号や立場に分けられている。これにより、時代による変化を確認することが可能である。

第6章では「他の称号と立場」と題し、今まで取り扱わなかった称号、古代エジプトの歴史においてもあまり目にすることがない称号を考察している。

第7章では「古代エジプト文学における女性のイメージ」として、古代エジプト文学の中の女性を表す単語を考察するといった内容である。

このようにアブデル・ハリーム・ヌール・アッディーン氏は、古代エジプトの女性を称号に焦点を当てて考察している。本稿では、彼の著作の第1章を翻訳し紹介したい。

.....

先史時代から現代まで卓越した文明を促進することに貢献した、かつての娘、妹、妻、もしくは母であるすべての女性に捧げる。

エジプト女性の共同体の建設において彼女たちの役割に共感し、彼女たちへのすべての可能な援助を与えたすべての男性に捧げる。

彼女たちの真価を認めたエジプトに捧げる。

序文

修士号を得るために適切なテーマを探して研究を行っている時、私は多くの本や論文が古代エジプト文明を理解しにくいものとして扱うのを目にした。私は、歴史的建造物や我々の博物館の展示品のあいだを彷徨わなければならなかったのである。

ついに、私は A. H. ガーディナーが書いた『ファラオたちのエジプト』に出会った。その本の中で、彼は古代エジプト社会における女性の役割がその初期の段階にあると述べていた。

私がカイロ大学文学部で古代エジプト語の教授であったアブデル・モハッセン・バキール博士に相談すると、彼は私を憐れみながら、私が遭遇することになる困難にもかかわらず、女性の役目と称号を扱うことに同意をしてくれた。私は覚悟をして古代エジプト語に打ち込み、同時にエジプト文明の中で男性の役割が証明されている一方、女性の役割には焦点が当てられることが必要であることに気づいた。女性の自然な役割は、主婦となり配偶者となることであるが、それが彼女のたった一つの義務なのか。彼女は、社会の発展に男性とともに参加したのか。それが、主に私が研究の中で探していたものであった。

このつつましい論文は、1964年に始まった。1966年に私は、カイロ大学文学部考古学科を卒業した。この本の出版は、しばしば私の力が及ばない理由で遅れることとなったが、これは私にとってこの分野において新しいものを付け加えるのに良い機会であり、私はこの本にいくつかの追加をおこなった。

エジプト社会のいくつかの局面を詳しく知ろうとする人たちのために、私は本の最後に参考文献をつけた。第2版ではさらに必要とされる注のすべてとさらなる写真と文章が含まれると思っている。

女性の役割の異なった局面に焦点を当てることによって、我々は女性が社会の中においていかに先進的であったことに気づくべきである。女性は多くの敬意を表する称号を保持し、国を統治する男性が行ったのと同じ方法で、彼女の国の政策を導いて、王位継承において様々な効果的な立場を占めていた。

この本を読むことで、我々は古代エジプト女性たちの業績に誇りを持つであろう。そして我々は、男性と女性がともに我々の先駆的な文明を促進するために大変密接な努力と信念を通して、エジプト社会がどこまで前進したか悟ることになる。

我々は、この英語版の準備にまっさきに貢献してくれたファトマ・エル・ナバウィ氏とワファ・アジーズ氏にお礼を述べたい。そして我々は、原稿をタイプしてくれた不屈のソヘイル・ハーミッド氏と、最終的な翻訳と校正のために甚大な努力をしてくれたナグラ・エル・ザフラウイ氏と、そして編集に貢献してくれたアルヤ・シェリフ博士に特別な感謝を表す。

我々は、また古物最高評議会出版部のすべてのスタッフに深く感謝する。彼らがいなければ、この本は日の目を見なかったであろう。

アブデル・ハリーム・ヌール・アッディーン
古物最高評議会事務局長

序章

女性は、古代エジプトにおいて重要な役割を担っており、しばしば男性と同じぐらい重要な役割を担っていた。その役割は、二つの局面を持っていた。一つは、家に関するものであり、もう一つは、社会における全般的な生活に関するものであった。配偶者としての女性は、生活

において男性の仲間であり、彼にとって大きな助けとなった。

私は、問題の範囲、つまり他の人たちがまれにしか取り扱わなかった主題を適切に理解するために、女性に関して書かれたものすべてに目を通さなければならなかった。そして、私はこのように初期王朝時代から新王国時代の終わりまでの女性の称号と立場を通して、古代エジプトでの女性の役割についての研究に関心を向けた。神や女神に仕えるために女性神官になったエジプト人女性についてのヘロドトスの記述や、イギリス人学者のガーディナーが古代エジプトにおける女性の役割や称号についての研究がまだ初期の段階であると述べたことに基づき、私はその主題に関心をもち始め、それらの謎を解明しようとしたのである。この研究は異なっていくつかの局面を持ち、そのいくつかは研究者たちによってすでに行われている。

女性は母親や配偶者として彼女の義務を果たし、子供の養育と教育を夫と分かち合いながら、彼の助けとなって家族をいつも助けるほかに、彼女はまた社会における強い立場を占めた。

夫と関係があるのは、相続財産における彼女の分け前や、結婚についてのすべてのものや、賢者が彼女について述べているもの、そして息子たちから母親への、そして夫から妻への賢者の教えなどであるが、これらすべての局面は徹底的な考察を必要とした。

墓壁の碑文や場面は、古代エジプト人の家族生活をよく反映している。夫と妻が義務と権利において等しい分け前を持っているとき、これらの場面のどこでも女性が無視されていたり、軽視されていたりはしない。反対に、彼女は仕事であろうと余暇であろうと、彼のほうに体を曲げているか、もしくは二人とも子供たちに囲まれて座って、夫と一緒に隣に表現されている。また、王族でも平民でも彼らの像は妻の横に立っている夫を表現しており、それは王族にも平民にもあてはまる。

すでにこれらの局面が注目されているが、私は彼女が女王や王妃であろうと、王もしくは宰相、神官、書記、高官、普通の役人の妻であろうと、女性の称号や立場を通して社会における女性の役割に焦点を当てた。召使や奴隷以外のすべての女性が、称号や立場を持っていたのである。

この研究は、先王朝時代から新王国時代の終わり、もしくは第 20 王朝まで網羅しており、続く王朝は、まださらに綿密な研究を必要としている。

我々は、参照した文献やしばしば記念碑自体から、女性たちが獲得したすべての称号と立場の研究を行った。我々は、女性の称号と男性の称号で似たものとの比較を行った。我々はまた、個人的な出来事もしくは国を統治したり王位に王たちを就けたり、もしくは彼らを排除したりする外交的な出来事を行っている王妃の役割を強調した。我々は、また女性神官や歌手、召使、泣き女などの他の女性たちの立場にも取りかかった。これらのそれぞれの立場は、個別に扱われている。それがどの女性によって、初めて就かれたかを確定し、他の称号との比較を行った。我々は、もし他の研究者の意見や推論があるなら参照して結論を出した。

我々は、時々これらの称号や、彼女たちの夫と同様に彼女たちの他の立場を取り入れた大変多くの女性の名前を言及しなければならなかった。しばしば、我々は称号の重要性を示すため

に可能な限り、社会的な階級に焦点を当てた。これらの称号の異なった観点からの考察がこの研究に付け加えられた。この研究はすべての王妃に言及している。なぜなら、他の女性たちと比べて、彼女たちの記録は手に入り易かったからである。

我々は、この領域でまた我々を大いに助け、我々を重要な参考文献に円滑に案内をしてくれた他の研究者たちの研究にも目をむけた。しかし、大きな困難もあり、以下に要約されよう。同じ名前を一人以上の女性が持つ事実など何人かの女王や女性たちの正確な歴史的時代を把握したり、多くの場合、称号が初めて使われた正確な時代を決定するといった困難である。さらに、多くの称号や立場が研究者によって無視されている。解釈のうちのいくつかは、研究者たちのあいだでの多くの議論の対象とされた。我々は、しばしば必要とされた情報を得るために多くの研究を行わなければならなかった。しかし、すべての参考文献が専門的であるわけではないため、それらが我々の参考文献に載せられている訳ではない。

我々は、大きな評価と感謝を、アドバイスをくれ助けてくれた教授や同僚に表したい。特に、私を助けてくれたアブデル・モハッセン・バキール博士、アラビア語の指導者であるマフムード・ヘガジ博士、彼の同僚であるアフメド・アリ・イスマイール氏、マヒール・アブデル・ハミード・エル・レイシー氏、ファトヒ・ハサネイン氏、アブデル・アジズ・サデク氏、アフメド・ユーセフ・アリ氏たちである。

我々はまた、この英語版の準備に貢献してくれたすべての人々に感謝を表したい。

第1章 古代エジプトにおける女王の役割

この章では、古代エジプト文明を同時代の他のすべての文明より進んだものにした古代エジプトの女王の役割を簡単に振り返る。古代世界の他の文明では、イラクはサムラマート（セミラミス）、古代シリアはゼノビア、古代イエメンはベルキスを讃えており、古代エジプトは、内政や外交に影響を及ぼした多くの重要な王の妻に加えて、6人の統治を行った女王がいることを誇りにすることができよう。

エジプト人の支配者は王族出身の母親と関連づけられていなければならなかったし、そうでない場合には彼は王位に就くために王女と結婚しなければならなかった。そこで我々は王位についての女王の立場について論じる。

この章はまた、王を排除する陰謀を企てた幾人かの女王が果たした否定的な役割にも焦点を当てる。

第1節 統治する女王

女性が国を統治することは、古代エジプトでは通常ではなかった。しかし、ある環境では幾人かの女王が国を運営し、統治することが許された。これは、多くの場合では王朝の終わりに起こった。おそらく第4王朝の終わりであると思われるが、ケントカウエス女王は王族間での

長い闘争の後、王座に就いた。ニトクリスはペピ2世の統治の下、腐敗に苦しんだエジプトを支配した。アメンエムハト3世の死後、混乱が国中に広がり、セベクネフェルウは第12王朝の終わりまでエジプトを統治しなければならなかった。タウセレット女王は、第19王朝の終わりまで、多くの弱い王の統治後もおそらくエジプトを統治していた。

統治をした女王の数について意見は異なっている。あるものは4人とし、別のものはこの数を排除した。しかし我々は、以下の女王の名前を挙げる。

メリトネイト	第1王朝
ケントカウエス	第4王朝
ニトクリス	第6王朝
セベクネフェルウ	第12王朝
ハトシェプスト	第18王朝
タウセレット	第19王朝

メリトネイト

メリトネイト女王に関しては、彼女がエジプトを支配したのか、単純に王の妻であっただけか異なった意見が挙がっている。

ワイゴールは、彼女を第1王朝の4番目の統治者として考えている。エメリーは、王妃メリトネイトと単独で名前がついたアビドスの墓でピートリーが発見した石碑によって、ホル・アハとジェル（ワジ）に続く第1王朝の3番目の統治者として彼女を分類し、彼女の統治の仮説を確信している。この墓の中での第1王朝の5番目の王であるデンの名前を有した印章が少数発見されているが、ある研究者はメリトネイトは彼の妻であり、メリトネイトの墓の隣にあるデンの墓が略奪され、二つの墓の中身は混同されたのが事実であると仮定している。エメリーはまた、メリトネイトが彼女自身のために建てた二つの墓、一つはサッカラに、もう一つはアビドスにあるが、これらは彼女が国を統治した女王であるという証として記載している。

一方アフマド・ファクリー、ドリオトン、バダウィ、アブデル・アジーズ・サレー、ナビールなどの研究者たちは、メリトネイトをデン（ウディム）の妻として考えており、彼らは彼女を統治者として考えていない。

ケントカウエス

第4王朝の最後の王であるシェプセスカフは、おそらく4年間のみ統治し、王座はケントカウエスに移ったとされているが、多くの議論が研究者のあいだで彼女の出自をめぐるなされた。彼女が王位継承においてどの程度権利を行使したのか、彼女がシェプセスカフの妹であったのか、もしくは彼の妻であったのか、彼女は国を統治したのか、しなかったのかといった議論である。

ケントカウエスは、「上下エジプトの女王」「上下エジプト王の母」といった称号を用いた。

ユンカーは2番目の称号から、彼女が単独で王座を継承する権利を持っていたために、彼女は「上下エジプトの女王」の称号を保持することを許されたと推測した。

ガーディナーは、ケントカウエス女王が第5王朝の繁栄に関わったと信じたが、アフマド・ファクリーは、彼女はメンカウラーの娘であり、決して国を統治せず、おそらく第5王朝の創始者ウセルカフと結婚し、サフラーとネフェルという2人の息子が連続して国を統治し、彼らの母親になっただけであると考えた。

この問題における彼の議論は、セリム・ハサンがケントカウエスは合法的な王位継承者であり、彼女はこの遺産を第5王朝へと引き継いだと結論づけた。彼は、彼女が王族ではない男性の妻であり夫の死により、彼女が自分の若い息子の後見人としてエジプトを統治することになったと考えた。

ネイトイケレト

第6王朝の終わりに、エジプトは何人かの弱い王に統治され、混乱し国の基盤が低下した。第6王朝の最後の統治者は、ネイトイケレトもしくはニトクリスであった。マネトによると、彼女はエジプトを12年間統治した。

多くの神話がこの女王の周りで生まれている。マネトは、彼女は当時最も美しい女性であり、第3ピラミッドの建設者であると述べた。ヘロドトスは、彼女がエジプトを統治し、王座に彼女を就けるために自分の兄を殺した人たちに復讐した後、自殺したと語っている。この物語はおそらく真実ではなく、エジプト人の語り部がギリシア人に向けて話したという事実が示しているのは、人々の報復を恐れた王が人々から打倒されるより、むしろ過去に自分自身の命を終えることを望んだことをエジプト人が誇りに思っていたということである。

ネイトイケレトは、サッカラとアビドスの王名表には挙げられていない。ただトリノパピルスのみが、ネイトイケレティをペピ2世の後の2番目もしくは3番目の女王として言及している。ニューベリーは、彼女がペピ1世の長女であり、メルエンラー1世とペピ2世の姉もしくは妹であり、彼女はメルエンラー1世と結婚し、彼の死後、ペピ1世の子供であったペピ2世が国の本当の統治者となったネイトイケレトの後見の下でペピ1世の後を継いだと主張した。

ニューベリーによると、イブシャーによってトリノパピルスに付け加えられた小さな断片は、彼女を「上下エジプトの女王、ネイトイケレティ、第2年第1月第1日」と言及している。

この女王は、なんとかエジプトの王座にいくらか就くことができたようであった。

セベクネフェルウ

王国の衰退がアメンエムハト3世の死後の第12王朝に始まり、この王朝はおそらくこの王の娘であったセベクネフェルウで終わりになった。つまり、彼女は彼の死後、アメンエムハト4世が統治したため、すぐには統治しなかった。しかし、彼女とアメンエムハト4世のあいだで関係を築くことはかなり難しく、彼らの共同統治の証拠もない。

セベクネフェルウは、アビドスの王名表には記されていないが、サッカラの王名表には、アメンエムハト 4 世の後にセベクカーラーとして記載がある。トリノパピルスによると、彼女の治世は 3 年 10 ヶ月 24 日のあいだ続いた。彼女をセミオフリスと呼んだマネットによると、彼女はエジプトを 4 年間統治した。

セベクネフェルウは、アメンエムハト 4 世の死後単独で統治するまで、時にはエジプトの王座をアメンエムハト 3 世と共有した。彼女の王座への就任は、いくつかの彼女の称号「上下エジプトの女王、二女神、ハヤブサ、2 つの国の貴婦人」によって証明されている。

ラビリンスの遺跡に残されている彼女の名前の証拠は、この建築物を建設したか、もしくは改修に彼女が携わった証となっている。彼女の統治は第 12 王朝で終わり、古代エジプトの歴史における最も繁栄した時代の一つである。

ハトシェプスト

古代エジプトにおける最も有名で権力のあった女性であり、彼女の治世は第 18 王朝だけではなく、古代エジプトの歴史全体において輝かしいものであった。

トトメス 1 世と王妃アハメスの娘であったハトシェプストは、他に男子がいなかったので王位の正式な相続人であった。しかしながら、彼女は彼女の父親の 2 番目の妻であるムウトネフェレットの息子であるトトメス 2 世という嫡出ではない兄弟がいた。彼は、王になるためにハトシェプストと結婚したのである。

トトメス 2 世の治世のあいだ、ハトシェプストは、「王の娘、王の妹、神の妻、偉大な王妃」という称号を保持した。

トトメス 2 世は、ハトシェプストとはネフェルウラーという娘のみが生まれたのに対して、2 番目の妻であるイシスとはトトメス 3 世という息子をもうけた。彼の息子に王位継承の権利を与えるために、彼は巧妙に主張した。トトメス 3 世は、アメン神の神殿で彼の父が行った儀式の中でアメン神官の神託によって王に任命された。しかしトトメス 2 世の死後、彼の息子は、たった 9 歳でハトシェプストの後見のもとで統治しなければならなかった。これは、彼女にとって国の本当の支配者になるために良い機会であった。初めは、トトメス 3 世の名前は時々公式の文書に記載されていたが、9 年目あたりには完全になくなっており、そしてハトシェプストがもっぱら 13 年以上支配した。彼女は、碑文で男性の衣装を着けて上下エジプトの女王として現れ、彼女は自分自身を王位への正統性を得るためにアメン神と関連づけた。彼女は自分の父親の娘ではなく、母親であるアハメスを訪れたアメン神の娘であると主張した。エジプトの女王になるために運命づけられた娘の誕生をアハメスに知らせる時、アメン神は彼女の夫の姿と態度で表された。この神話は、デル・エル・バハリの彼女の葬祭殿の壁に彫られた。同じ葬祭殿の壁に、彼女は、神である父が宮廷で行われた大きな儀式で彼女を承認したと彫らせた。

ハトシェプストは、彼女が獲得した権力を適切に行使できるように強力な助けが必要であると考えた。そこで、彼女は忠実な役人の一団を雇い、彼らに国で高い地位を与えた。彼らの中

で、デル・エル・バハリのハトシェプスト葬祭殿建設の監督の責任を与えられたセンムトは、宰相、裁判官、神官の長、宮廷の長であったハブセネブや、王の印章持ちであったジェフウティや他の高い地位の役人と並んで卓越した存在であった。

アハモセが開始し、彼の継承者が引き継いだ領土拡大の対外政策は、どのような軍事事業も行わなかったハトシェプストの治世に中断された。結果的に、彼女の治世の終わりに、いくつかのアジアの州がミタンニによって扇動された反乱を始めた。トトメス3世が自国を強固にするために敵に向かって軍の先頭で進軍して事態を処理した。

ハトシェプストの一番の関心事は内政であり、彼女は鉱山と石切り場を適切に用い、国の必要なものを輸入するためにブントに彼女の有名な遠征隊を送った。彼女の治世の建築は、センムトが監督した建築物である彼女のデル・エル・バハリの葬祭殿に表されるように、大きな発展の証拠となった。彼女がカルナック神殿に残した建造物も同様である。しかし、彼女がトトメス3世を厳しく扱ったことは、彼に根深い痕を残した。彼は復讐を求め、ハトシェプストの死後、何人かの味方とともに、王位への自分の権利を回復し、ハトシェプストの称号や名前を消し、彼女の建造物や彼女の友人の墓を破壊し、彼女の治世に関わるすべてのものを取り除くなど、執拗にハトシェプストの名声を探し続けた。

このように、この有名な女王の治世は終わり、トトメス3世が王位に就いた時、彼はハトシェプストの治世の期間を無視して、自分の父の死から自分の治世の日を始めた。

ハトシェプストは、究極の才能をもって確固として猛烈に国を支配した。しかし、我々は劇的な状況の中で起こったと思われる彼女の死について何の情報も持っておらず、また彼女のミイラは見つかっていない。

タウセレット

第19王朝の終わりに、メルエンプタハの死をもって混沌が国中に広がり、王座を獲得するための陰謀が始まった。しかし、この王朝の終わりはなぞに包まれている。王座を求めて多くの競争者が争ったなかには、シプタハ、アメンメス、セティ2世、女王タウセレットがいた。

多くの研究者は、女王タウセレットの人物像について一致していない。彼女が王の配偶者であったのか自らが統治した女王なのか、また彼女が合法的に統治したのか非合法的に統治したのかということである。ガーディナーは、彼女を紀元前1202年から紀元前1194年までの8年間統治した第19王朝の最後の女王であると考えた。

ルフェーブルは問題を検討して、タウセレットの名前が時々単独で、またはメルエンプタハ、シプタハ、セティ2世とともに確認できたと述べている。これは多くの議論と混乱をもたらした。彼は彼女を統治者とは認めなかった。

他の幾人かの研究者は、王家の谷にある彼女の墓(KV14号墓)が、王であるメルエンプタハの明確なカルトウーシュを保持していたという事実から、タウセレットは彼の妻であったと考えている。彼女は、「王の妻、2つの国の貴婦人」と「北と南の貴婦人」といった称号を保持していた。

ナギーブ・ミカエルによると、タウセレットは彼女の夫であるメルエンプタハ・シプタハの死後、セティ2世と結婚した。彼は、二人の共通の宝石のコレクションである銀の腕輪に仮説の基盤をおいている。その宝石には、女王が王であるセティ2世にワインを注いでいるところが描かれ、「偉大な王の妻」の称号が記されている。彼女はセティ2世の死後、国を統治した。

タウセレットが、メルエンプタハ・シプタハの妻であったにしろ、セティ2世の妻であったにしろ、彼女が統治した女王であったという仮説を受け入れることは難しくない。これは、ルクソールの6つの葬祭殿に用いられている基礎ブロックによって確認される。特に、2つのカルトウーシュが記されている1つのブロックには、1つ目のカルトウーシュの前には王の娘メリトアメンの名前を含む「上下エジプト王」もしくは「2つの国の主」の称号が記されている。2番目のカルトウーシュの前には、「サ・ラー（ラー神の息子）」もしくは「現れの主」が記されており、タウセレット・セテペト・エン・ムウトの名前を含んでいる。これは、エジプト考古学博物館のオストラコン（No. 25263）によっても証明されている。その碑文は、「タウセレットの治世第8年」で始まっている。

もし、タウセレットが統治した女王とする仮説が確認されるなら、彼女が新王国時代の終わりまでで統治をした最後の女王になるであろう。

第2節 国を統治することに参加した王妃

独占的に統治をおこなった女王のほかに、王の妻として重要な役割を果たした王妃もいた。彼女たちの幾人かは、国の外交や内政の重要な出来事に関わって王に影響を及ぼすことが可能であった。

もし我々が第18王朝の王妃と比較して、古王国・中王国時代の王妃を簡単に見返しても、国の政策に重要な役割を果たした王妃を見つけることはできない。

新王国時代に関して、その時代の政治活動において重要な役割を果たした最も有名な王妃は、セケンエンラーの妻であるイアフヘテプ、イアフメスの妻であるイアフメス・ネフェルタリ、アメンヘテプ3世の妻であるティイ、アクエンアテンの妻であるネフェルティティであり、彼女たちはすべて第18王朝に属している。

イアフヘテプ1世

彼女は、ヒクソスに対抗して戦った英雄の一人であるセケンエンラー・ター2世の妻であり、エジプトの解放者、第18王朝最初の王イアフメス1世の母親である。

この王妃の重要性は、ヒクソスとの戦いのあいだ、彼女が重要な役割を果たしたことによる。それは、カルナック神殿の第8塔門の前で発見された石碑に記された碑文に見られる。碑文は、イアフメスの称号と彼の業績で始まり、次に彼の母親であるイアフヘテプに関する文章が書かれている。すべての人々に次のような言葉で彼女を讃えるように命令をしている。「国の貴婦人を讃えよ。地中海の島々の貴婦人、すべての異国の中で有名な者、彼女は人々に計略を

明確にする。王の妻、王の妹。彼女に長く健康な人生を。王の娘、王の高貴な母親、エジプトの出来事を気にかける賢者。彼女は軍隊を気かけ、彼女は難民を連れ戻し、逃亡者を集め、彼女は南（上エジプト）を鎮圧し、反乱を鎮めた。王の配偶者、イアフヘテブ、彼女が生きますように。」

このように彼女を讃えることによって、イアフメスはエジプトがヒクソスに対して苦しんでいるあいだに彼女の偉大な役割を証明した。彼女は、国民の愛国心を支えていた。彼女は、自由と独立のために戦い、侵略者を倒そうとエジプト人を鼓舞した。彼女は、夫が名誉の戦いで殺されるまで、彼とともに戦った。彼女は、自分の息子であるカーメスを鼓舞しながら、彼とともに実行した。彼は、侵略者たちからエジプトを自由にし、尊厳を取り戻し、圧政の支配を取り除こうと決心したイアフメスに従った。

イアフヘテブは、彼女が目的を達成しようとする時、エジプト人女性が男性と同様に強く、そして決意が固いということを証明した。彼女は、つらい仕事の成果を得るであろう。イアフヘテブはエジプトを解放しようとして達成した。

イアフメス・ネフェルタリ

セケンエンラー・ター2世と王妃イアフヘテブの娘、イアフメスの妻であるイアフメス・ネフェルタリは、まだ若い時にヒクソスとの争いを目にした。イアフメスとの結婚で、彼女は夫とともにほぼ22年間統治した。夫の死後、彼らの息子はまだ早い段階でエジプトを支配した。彼女は息子の横に立って、彼が国を統治するのを助けた。

マスペロは、これについて次のように述べている。アメンヘテブは、彼の父が王位継承者として彼を残して天へと旅立った時、まだ成人には達していなかった。ネフェルタリは、彼女自身で権力を継承した。彼女の死後、彼女は人々に大変深い感銘を残し、人々は彼女をアメン神、ムト神、コンス神の三柱神と同等のレベルで最大限に讃えた。彼女は崇拜され、神のレベルまで引き上げられ、王たちが高められた以上に尊敬された。

テーベでは、神殿がイアフメス・ネフェルタリを記念して建てられた。彼女は大いに尊敬されていたので、エジプト人は彼女と彼女の息子のアメンヘテブ1世をネクロポリスの神々の守護者にした。彼女は、墓地、特にデル・エル・メディーナにある墓地の多くの壁画に描かれた。彼女は礼拝され、もともと神のために行われていた祈りを彼女のためにささげるように多くの神官たちがあてがわれた。彼女は、神官たちによって通常運ばれる小舟を設置するための自身の聖堂を持ち、神々のために行われるのと同じ榮譽ある行進をおこなっていた。彼女は、死んでから第21王朝までの600年以上ものあいだ礼拝された。これは、アメン神、ムト神、コンス神、イアフメス・ネフェルタリを礼拝した第21王朝最初の王であるヘリホルを代表とするカルナックの碑文から証明されている。30以上の類似した碑文が、テーベやエドフ、アビドスから発見されている。

我々は、彼女の描写に使われる色についての意見にも触れなければならない。それは、彼女の肌が黒や、時々青で描かれているということである。彼女は、上エジプト出身もしくは黒人

の支配者の娘であったかもしれない。イアフメスは、ヒクソスとの争いのあいだ、彼女の父親からエジプトへの援助を得るために、彼女と結婚したのかもしれない。多くの議論が、この問題についてなされていたが、それらは、彼女のミイラがデル・エル・バハリで見つかった時、完全に終息した。彼女は、通常行われるように、麻の包帯でおおわれておらず、彼女が白人であることは明らかであった。このことは、可能性のあったすべての議論を終わらせた。

ティイ

古代エジプトにおける最も有名な王妃の一人であるティイは、アメンヘテプ3世の配偶者であり、当時、重要な役割を果たした。彼女は、この王の治世第2年に彼と結婚した。彼女は王家の血筋ではなかったが、ミン神の神官であり王の戦車の長であったユヤの娘であった。

彼女の母親チュウヤは、王のハレムの長であった。王は、次のようにこの結婚を記録するように命じた。「アメンヘテプ、生命が彼に与えられますように、彼の妻、王妃ティイ、永く生きますように。彼女の父ユヤ、彼女の母チュウヤ・・・彼女は国境を南はカロイまで、北はナハリンまで広げた最強の王の妻である。」

古代エジプトの歴史において、多くの栄光ある出来事がこの王妃の時代に起こった。彼女は、エジプト帝国が軍事的に経済的に文学においても栄えたアメンエムハト3世の治世に育った。ヒクソスとの長い争いの後、エジプトは平和と繁栄の中にいた。帝国のすべての豊かさは、アメンエムハト3世の手の中に注がれ、彼は贅沢と享楽に溺れた。

結婚によって、彼はエジプトの伝統を破壊した。王妃となる女性は、王と結婚するためには王族出身の親から生まれていなければならなかったが、この結婚には、2つの理由が考えられる。一つ目が、王が結婚しようとしたとき、正統な女性相続人がいなかったためである。そして二つ目が、王のハレムの一員であったチュウヤにとって、ティイの強く魅力的な性格に魅了された王に娘を紹介することは容易であったと思われることである。

この結婚の本当の理由を推定することはかなり難しい。この問題に触れている文書はかなり少ないが、それらはティイが夫からなされた最大限の配慮を明らかにしている。彼は彼女を喜ばせるために最善を尽くし、彼は彼女の魅力の虜となった。彼は、規則と伝統を破壊した。通常妻が夫の横に描かれる場合、夫より小さく描かれるが、ティイの場合、そうではなかった。彼女の像や描写のすべてにおいて、彼女は、エジプト考古学博物館に展示されている巨大な彫像に見られるように同程度で表現された。ティイは個性の強さのおかげで、夫から大変尊敬されていた。

ミタンニの女王との二番目の結婚で発布された王の布告は、いかに王が王妃ティイを尊重していたかを明らかにしている。「ギルヒバ、ミタンニの王の娘、アメンヘテプと、彼の素晴らしい配偶者ティイ（父親の名前がチュウヤである）の治世第10年、ミタンニの王子シュタルナの娘は、317人の女性のお付きのものとともに陛下の下にやってきた。」

王の異国の王女との政略結婚に際して、王妃ティイと結婚して8年が過ぎていたが、王はまだ彼女の名前を彼女の父親の名前とともに挙げている。それは、彼女の父親に関連付けて彼女

の高い地位を確実にしていた。

彼の二番目の結婚から1年後、アメンヘテブは大きな池を掘ることを命じ、そこで王妃ティイは金の小舟に乗ることが出来た。彼女はまた、通常王族出身の王妃に与えられた多くの称号「王の娘、王の妹、2つの国の貴婦人・・・」を与えられた。これらの称号が、事実に一致しないことは明らかである。ティイは、王の娘でも妹でもなかったが、これらはアメンヘテブによって彼女に与えられた名誉上の称号であったのである。彼は、このように規則を破った。

アメンヘテブは、いつも自身がバベルやミタンニからの異国の少女に囲まれていることに執着した。ティイは、この騒がしい環境の中で過ごしたが、宮廷や帝国の政策に関してティイが支配権を持っていた証がある。つまり、東部地域の王子や支配者たちが彼女に大変心を配り、よく彼女に親密に手紙を送っており、このことを認めていたのである。国における彼女の高い地位は、彼らすべてによく知られていた。彼女の夫の死後、ミタンニの王が送った1通の手紙が雄弁に物語っている。彼は、次のように書いている。「あなたは私があなたの夫の良き友人であり、あなたは私が彼に書いたことと彼に話したことを知っている。あなたはまた、あなたの夫が私に書いた言葉を知っており、私の使いはこのことを知っている。しかし、あなたは私の使いの者たちよりもっと多くのことを知っているでしょう。」そして彼は、彼女に良い返事の証としてエジプトの金をいくらか送るように求めた。

ティイとアメンホテブ3世には、二人の息子がいた。トトメスは父親がまだ存命中に死に、アメンヘテブは歴史上アクエンアテンという名で知られることになる一神教を取り入れた最初の王である。彼は、唯一の神としてアテン神崇拜を説いた。この宗教的革命は、トトメス4世の治世に端を発し、アメンヘテブ3世はティイが新しい宗教の支持者の一人であったこともあり、この宗教に強い関心を持っていた。彼女は夫をそちらに改宗させようとしたが、彼は新しい宗教への支持を表さず中立的な態度で贅沢を好んだ。この態度には、仮にも彼にわからせようとし、新しい神アテンを受け入れさせようとする力ある王妃はよろこばなかった。彼女は、「アテンの美」という小舟の名前に示されるように一定の成功を実現した。それは、夫の同意があったことは疑いがない。

アクエンアテンが彼の父親の死後、王位を継承した。彼は12歳で彼の母親ティイが、少なくとも4年か5年のあいだ息子の後見人としての実質的な支配者となった。テル・エル・アマルナの石切り場の一つで発見されたカルトゥーシュからこの仮説が実証できる。王妃の名前が、彼女の夫や息子の名前もなく単独で彫られている。これは明らかに、彼女自身の命令によって行われた。

ティイは、敷かれた道に彼女の息子を誘導した。彼女は、統治権とアメン神官たちの増力する権力のあいだで中間的な政策を望んだ。彼女は、決してアメン神を抑圧することを望まず、長いあいだエジプト人が知っていたものとは異なる内容でラー神の教義を示そうとは考えなかった。彼女は、アクエンアテンの治世の初め頃に彼とアメン神官たちのあいだで起こった争い事、つまりアクエンアテンの治世第6年目に大きくなり、ある規模に達した論争を招いた。彼が新しい首都をテル・エル・アマルナに移してテーベを捨てたのは、彼の母親の意見によるも

のに違いなかったからである。

アケトアテンの町の建設に際して、アクエンアテン王はアメン神の名前とこの神についてすべてを消し去るように命じ、危機を大きくした。ティイは、争いを緩和するために介入しなければならなかった。彼女は、治世第12年頃新しい首都に向かったが、彼女の訪問は、アクエンアテンとネフェルティティのあいだのさらなる揉め事に終わった。彼女は目的に失敗し、テーベに戻った。訪問のすべての詳細は、フィの墓の壁に記録されている。

彼女の息子の治世の下でも、彼女の夫の治世のあいだにアドバイスをしていたのと同じ方法で、彼女は国についてすべての内政と対外関係に関与した。これは、トゥシュラッタからアクエンアテンへの文書によって確証される。「あなたの父、ニムムアリアは、私に次のように書いて書いた。ティイ、ニムムリアの配偶者、最も偉大で愛されし者、あなたの母親はこれについてのすべてのことを知っている。あなたの母親ティイにこれらのことについて尋ねなさい。」アクエンアテンへの2番目の手紙に、トゥシュラッタは次のように言っている。「私があなたの父親について話したすべてのことを、あなたの母親ティイは知っており、他のものは誰も知らない。」

これは、彼女の夫の生存中、そして少なくとも彼女の息子の治世の初めにおいても、様々な領域での彼女の役割と干渉の明らかな証拠である。

長くて活動的な人生の後、ティイは死んだ。いつ死んだのか特定するのはかなり難しいが、おそらく彼女の息子の治世の終わり頃であり、彼女はテーベに彼女のために特別に準備された墓に埋葬された。

ネフェルティティ

アクエンアテンの妻であるネフェルティティは、彼を支えて新しい宗教の基盤を設立するのを助けた。多くの議論が彼女の出自について持ち上がり、彼女がミタンニ王の娘タドゥヘパであったと信じる者もいた。しかし、これは不確かな見解である。ネフェルティティの起源は、エジプト人である。彼女にはエジプトに妹がおり、彼女の乳母は後にエジプト王になった神官アイの妻ティであった。これは、ネフェルティティが王家の血筋を引く王妃が保持していたすべての称号を保持していたけれども、彼女が王族出身であったということを証明していることにはならない。彼女の称号は、王妃ティが用いたような肩書だけの称号であったに違いない。

彼女がタドゥヘパであろうがトゥシュラッタの娘であろうが、彼女はアクエンアテンの配偶者であり、ネフェルティティが彼の愛された妻であり、彼のお気に入りであったという事実である。なぜならば彼らはいつも一緒にアテン神を礼拝し、王はいつも彼女のことを次のように述べていた。「私の心が、王妃と彼女の息子たちによって満足させられている限り。」ネフェルティティは、彼の母親がしたのと同じように、彼のそばに立った。そして、彼女は彼が新しい宗教に熱心であったのと同じくらい熱心であり、彼に愛と喜びの感情を起こさせた。彼は、「王妃と彼女の子供たちに対する愛が私の心を満たした。アテン神が、ネフェルティティに長い命を与えますように」という言葉で表現した。ネフェルティティはお返しに、彼女の夫を次のよ

うな言葉で喜ばした。「あなたを愛するあなたの息子に生命と真実を与えなさい。二つの国の主、アクエンアテン・・・」

ネフェルティティは、第12年にテル・エル・アマルナへの王妃ティイの有名な訪問まで夫とともに平和に暮らした。アテン神への信仰をあきらめさせようとした母親のために、息子に紛争と不和の多くの問題をもたらした。そして、それらは母親のために内政外交両方において財源の欠乏へと国を導くことになる。

ネフェルティティは自分の主義を貫き、彼女は王妃ティイが作り出した問題をテル・エル・アマルナにそのままにしていたティイの介入を拒んだ。問題は夫と妻のあいだで続き、彼らは別々に暮らすことになった。アクエンアテンは王宮に、一方ネフェルティティは「フウト・アテン（アテン神の王宮）」と呼ばれる南の王宮の一つに住んだ。これは、いかに彼女がこの新しい宗教にかかわっていたかの証となる。

アクエンアテンは、王宮の女主となった彼の長女メリトアメンとともに王宮に住んだ。ネフェルティティの名前を消し、その代わりに彼らの娘の名前に置き換えるという命令が發布された。ネフェルティティは、ツタンカーメンとともに彼女の王宮で姿を消し、第12年目か第15年目には、彼女について何も言及されなくなった。彼女が死亡した日や埋葬場所は、未だ知られていない。

我々は、ここにネフェルティティと関連する問題を提起しなければならない。碑文研究者が、誰のものか明らかにできない手紙がある。ある研究者はネフェルティティ、アクエンアテンの未亡人がこの手紙の持ち主であるとし、ほかの研究者はアंक・エス・エン・パ・アテン、ツタンカーメンの未亡人と関りがあると主張している。しかし、ムルシリ2世の手紙の一つが、真実を明らかにしている。ムルシリ2世、ヒッタイトの王は、彼の父シュッピルリウマとエジプト人の未亡人、王妃ダカマウとのあいだの往復文書について言及している。王（ペプ・コルリア、他の解釈ではネブフリヤ）の死後、王の未亡人はシュッピリウマ1世に手紙を送った。その内容は、彼女には息子がなく、自分と結婚してエジプト王にするために彼の息子の一人を急いで送ってくれるように彼に知らせたものであった。ヒッタイトの王は疑って、代わりにエジプトに使者を派遣した。王妃は息子はいないが、臣下と結婚するつもりはなく、エジプトを消滅させるつもりもないと返答した。シュッピルリウマは納得し、息子の一人をエジプトに送ったが、エジプトへ向かう途中で死んでしまった。

異なった意見が、ペプ・コルリアの名前に関して挙がっていた。ある者はそれがアクエンアテンであるとし、他の者はアマルナ文書の中のアクエンアテンの名前はネクリスでありペプ・コルリアではなく、それは「ネブ・ケペルラー（ツタンカーメン）」であるとした。言及されている王妃は、彼の未亡人アंक・エス・エン・パ・アテンであり、彼らの議論は手紙の王妃が自分には子供がいないと述べていることにある。一方、ネフェルティティには多くの娘がおり、彼女はまたその成長した子供たちにも夫を探していると述べており、ネフェルティティは若くなかった。

この物語は、ヒッタイト王子がエジプトの国境に到達した時、彼の殺害で終わる。この機会

を待っていたアイが王座に就いた。恐らくヒッタイト王子を殺害したのは、彼の従者であったに違いない。

第3節 王妃と陰謀

一人以上の女性と結婚することは、王に王座の権利に関する多くの問題を引き起こした。各々の配偶者が、自分の息子を父親の後に王にさせたいと望んだ。これは、王が他の妻の息子を王位継承者として選んだと妻たちの一人が感じた瞬間、激しい争いを引き起こした。そして、彼女は王宮のハレムや役人の助けでその時の王を排除する陰謀を企て始めた。

最初の王への陰謀は、第6王朝になる。王ペピ1世は彼の妻ウェレット・イムテスと彼の宰相を訴えたが、文書はそれについて触れていない。それは、王に愛され、大事にされたある妻に対しての王妃の陰謀であったに違いない。王は、問題を調査するために、優れた人物であるウニに命じて、宰相がどのように陰謀を企てたのか真実を明らかにしようとした。文書は、この問題について決して詳細に述べていないしペピの決定にも言及していないが、ウニは彼の時代の王に仕えているあいだ自分の業績を記録し日記を書いており、この問題を以下のように述べている。「偉大な王妃ウェレット・イムテスに対してハレムの中で秘密の裁判が行われたとき、陛下は私に彼女のところに行って、どの宰相も私のようななどの役人も同席せず、一人でその事件について聞くことを許可した。なぜなら私の能力と私への高い信頼のためである・・・私は、一人の裁判官とだけでこの事件を記録した。私の立場は、財産の管理人であった。私以外の誰かがこの秘密を知っているということは、決して起こらなかった。しかし、陛下は私に知らせた。なぜならば、ハレムでのどの役人や貴族や召使よりも私の高い地位のためである。」

このテキストを通して、我々は、王がウニに以前には決して起こらなかった事件を調査することを命令したと気づく。ウニは法に関連した立場を持っており、このような事件は通常、高度な裁判として宰相の責任になるが、宰相はおそらく王の治世第21年以降に起こった陰謀に関わっていたようである。王はウニを信頼していたので彼に頼むよりほかに方法はなく、ウニ自身が認めたように、伝統を打ち破るより方法がなかった。

この陰謀の本当の原因は、関係のある文書が発見されない限り謎である。

王妃ウェレット・イムテスの裁判の後、ペピは彼の権力を強固にするために、アビドスの君主の娘とそして彼女の妹と結婚した。

第12王朝における他の似た陰謀は、第12王朝創始者のアメンエムハト1世殺害を目的としたものである。彼の遺書のなかで、彼は息子に警告し、彼が経験した殺害の企てについて彼に話している。彼の最も親しい友人が彼を裏切った。これらの話は、女性の陰謀か、王座に就くために戦っていた彼の敵の一人であったのかは、明らかではない。他の意見は、彼の妻の一人を指摘している。王が他の王妃の息子であるセンウセレットを王位に就けようとしているのを彼女が悟った時のことである。この陰謀は、王子の不在のあいだに行われた。彼はエジプトの外での戦いの一つを率いていたが、彼の王国を支配するためにすぐに戻った。

他の見解は、これらの助言がセンウセレトの治世のあいだに王座への彼の正統性を証明するために彼の父によって書かれたと仮定している。

古代エジプトの歴史の中で最も有名な陰謀は、第20王朝にラムセス3世に対して起こされたものである。三つのパピルスが、この問題について詳細を明らかにしている。トリノの司法パピルスとパピルス・リーとパピルス・ローリンである。

これらの文書は、簡単に言うとラムセス3世の妻の一人、王妃ティもしくはティティが、王が彼女の息子ペンタウラーを王座から排除しようとしていることを知ったことに関係するものである。そこで彼女は、彼を殺して、彼女の息子を王と宣言することを決心した。宮廷で高い地位にいた2人の役人、メセドスラーとパバクアメンが彼女を助けていた。

パバクアメンは、宮廷の内外に行くことができたので、ハレムの母親や姉妹たちのメンバーに「彼らの主に対して攻撃的な行動を始めるために敵を助長するように」という内容の手紙を届けなければならなかった。宮廷の幾人かの兵士と見張りも助けていた。1人の神官と6人の女性もまたこの陰謀に加担していた。彼らは、王に背いて、エジプトを攻撃するためにヌビアにいた軍隊を鼓舞し始めた。彼らは、自分たちの運動に軍隊のうちの一つからリーダーを得ることに成功した。彼は、ハレムの一員である自分の妹を通して陰謀の詳細を少しだけ気づいていた。ティイと彼女の従者たちはハレムや王や彼の仲間に魔術を使ってさえ陰謀を行った。

この陰謀についての議論が研究者たちの間で起こった。我々は、それが成功したのか、そうではなかったのか、また王が死んだのか、囚人の裁判に出席したのかについて証拠がない。

文書の中で、王は「偉大な王」と呼ばれているが、王の名前が特定されていないため、何人かの研究者はそれが暗殺された王とし、陰謀者たちの裁判は彼の息子であるラムセス4世の治世に起こったとしている。

陰謀の詳細は、ガーディナー、ドウ・バック、エルマン・ウィルソン、ドリオトン、セリム・ハッサン、バダウィといった多くの研究者たちによって議論された。我々の現在の研究は、この発見された陰謀での王妃ティの役割と、そして他の陰謀者たちと同様に王妃と彼女の息子の裁判に焦点を当てている。極めて特別な裁きがこの事件のために整えられ、陪審員が自由裁量権を行使し、彼らの判決はペンタウル絞首刑と残る3人には自殺というものになった。

我々は、王妃ティの判決についての文書を持っていない。陰謀者たちは、固有名詞で名を挙げられなかった。このことは、明らかに陰謀の様々な面を解明しようとする研究者の助けにはならなかった。

第4節 王位継承における王妃の役割

王妃は、王位継承で重要な役割を果たした。エジプトの伝統では、王座へ昇るには厳しい条件での制限があった。王は王妃の息子であるべきであった。もし彼が2番目の王族出身でない妻の息子であった場合、王族の王女と結婚することによって王座への正統性を固めなければなら

らなかった。我々は多くの王の例を見ることが出来る。

第18王朝の王で王族出身ではない母親から生まれた息子トトメス1世は、王位の女性継承者である王妃アハモセと結婚しなければならなかった。そしてアメンホテプ1世には男性の王位継承者がいなかったため、トトメス1世は国の正統な支配者としてみなされたのである。トトメス1世にもまた男性の王位継承者がいなかった。彼には、母親をアハモセとする娘のハトシェプストしかいなかった。しかし、彼は2番目の妻からトトメス2世を得た。彼も正統な王となるためにハトシェプストと結婚しなければならなかったのである。

これらの例は歴史においていくつかあるが、それは王妃としての偉大な役割が王位継承に関連していたことを明らかにしている。王妃は王座に就くために王を助けるだけでなく、男性の後継者がいない場合、自ら王座を継承する権利を持っていた。彼女たちは、第2王朝以来この権利を与えられていた。

ニネチェルは、男性の継承者がいなかった。しかし、彼には正統な王族出身の娘がいた。そこで、彼は国の王座を継承する権利を彼女に与える法を制定した。

この法は、多くの王朝の創設に多くの重要な結果をもたらした。

女性たちは、実際に支配者としては受け入れられなかった。そこで、王女たちは正統な女性王位継承者との結婚を通して王になる王族出身の王子と結婚しなければならなかった。

何人かの王妃と王女が「女性王位継承者」の称号を受けた。第3王朝に王女ヘテプヘトネブティ、おそらくジェセル王の娘がこの「女性王位継承者」の称号を使った。彼女が王座の女性継承者、少なくとも彼女に正統な権利を与えるように考慮して、その称号を彼女に与えたのは、父親であったに違いない。

第18王朝では、王妃アハモセが「オシリスの女性継承者」の称号を有し、ハトシェプストは「ホルスの女性継承者」と「アメン・ラーの女性王位継承者」を有した。

これらの称号は、王妃が継承への権利を持っていたとエジプト人が考えていたことを明らかにしている。ヘテプヘレスは、第4王朝の創始者スネフェルと結婚した。その結婚は、彼の統治を正統化し、彼の権力を強固にするのを助けた。

これは、王座を継承するだけでなく、ある王朝から別の王朝へ継承の権利を移行する王妃の役割のもう一つの面である。

王朝の創始者は、たまに正統性に欠けていることがある。そこで、彼は王権への正統な権利を強固なものにするために、未亡人もしくは先王朝の最後の王の娘との結婚しなければならないことになる。これについての一つの例は、第4王朝の創始者、王スネフェルと結婚した王妃ヘテプヘレスであろう。この結婚は、国を統治するに際して、彼の立場を確立するのを助ける権威を彼に与えた。

Dedication

In the beginning, I would like to express my deep sympathy to the death of Dr. Abdel Halim Nur El-Din, who passed away in November 2016. He accepted me as PHD candidate in the Faculty of Archaeology, Cairo University. He was a representative Egyptologist who served the Egyptian Antiquities Organization as Director in 1988 and the Supreme Council of Antiquities as Secretary-General from 1993 to 1996. I am very glad to have a chance to translate his book into Japanese. I thank also his daughter, Ms. Abeer Abdel Halim Nur el Din, for kindly allowing me to publish his book. My thanks also go to Dr. Hisham Al-Leithy, Director of the Research and Press Center at the Ministry of Tourism and Antiquities for this publication. Finally, my appreciation is given to Dr. Salah El-Kholy, who was also supervisor for my PHD, arranged this publication for me.

This work was supported by JSPS, KAKENHI (21H04366).

